

「主イエスの命が現れる」

2014年4月27日

教会の暦で、今日の4月27日（日）に読むように定められている御言葉は、パウロが書いたコリントの信徒への手紙 二 7節～11節です。「ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、 虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために。わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために」。

パウロは自身を「月足らずで生まれたようなわたし」また「実際に会ってみると弱々しい人」と言われていると書いています。頑健で、見栄えのよい人ではなかったようです。更に、パウロは病気持ちでした。目が悪かったことは確かです。その他、てんかん、風土病などを持っていたという説があります。その病気をサタンから送られた「とげ」と言って、大変苦しみました。パウロの肉の体は壊れそうな土の器でした。しかし、その土の器に宝が納められていました。宝とは主イエスの福音です。パウロが体験した福音は、主イエスの十字架によって、罪が赦され、全ての人が神の是認の元に置かれている、是認に与った者として互いに愛し合いなさいというものでした。この宝、福音に押し出されて3回も、現在のトルコ、ギリシャ地方を徒歩で、地中海を船で、疾風のように駆け巡り、クリスチャンを生み出し、至る所で教会を建てています。パウロは、この働きは自分から出たものでなく、神の力であると語っています。奇跡とも言ふべき伝道によって、主イエスの命が鮮やかに現されました。主イエスの愛が息づいたのです。しかし、そのことが起こるために「イエスの死を体にまとっています」という事実がありました。「イエスの死」とは主イエスの十字架です。

パウロはフィリピ書3章11節、12節で「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」と書いています。主イエスの十字架の苦しみに与り、死の姿にあやかる時、主イエスの復活の命に達することができる。ここには、深い罪認識があります。パウロは、ローマ書7章19節、20節で「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです」、24節で「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」と呻いていました。そのパウロは、復活した主イエスとの出会いを通して、十字架の死が、罪を赦し、呻きから救ってくださる出来事であることを生き生きと体験したのです。それは、主イエスの十字架の苦しみと死につながることによって、復活の命に与ることができる確証でした。「イエスの死を体にまとって、絶えずイエスのために死にさらされて」と十字架の苦難と死につながっている。そこに、主イエスの命が現されているのではないかと訴えています。

ここに福音の真理があります。人は皆、罪が生み出す苦難の中にあり、死の恐怖に晒されています。それらは、主イエスの十字架によって超えられていると、聖書は宣言しています。キリスト教信仰は、この宣言への全き信頼です。その信頼に立つ者は、隣人と時代の苦悩を自分の身に担って共に生きる。そこに、愛に満ちた「主イエスの命」が現れている喜びを確認する。これを信じ、望んで生きるのが、わたしたちの信仰です。